



妖精の枝史^し

前編

novels

大森藤ノ

「男の人が、女の人を守りたくなる気持ち……わかるような、気がしました」
その言葉に。

胸が甘く、そして切なく、震えてしまった。

どうしようもなく熱く、痛く、痺れを伴う感情の劇薬が、胸の奥から全身の隅々まで、行き渡った。

——貴方は、ずるい。

そう恨み節を言わなければならなかった。

そう言って少年を軽蔑して、自分を戒めなければならなかった。
しかしリユーは何も言えなかった。

自分をかき抱く両腕を、愛おしく思ってしまった。

(私は……)

無様にドクドクという血の音と、熱を頬にかき集める。

身じろぎし、あたかも求めるように、背中をもっと押しつける。

地面に腰を下ろし、リユーを抱きしめる少年も応えるように、腕に力を込めてくれた。

震える吐息が漏れた。

どうしらはつくられても、それは甘いものだった。

(私は……)

薄鈍色の少女に謝った。

もう誤魔化すことはできなかった。

彼との記憶が蘇る。リユーにとつて不可思議で、濃密で、かけがえのない『五ヶ月の日々』が潔癖を洗い流してしまう。

後ろを振り向きたい、と心が囁いている。

すぐ横にある綺麗な深紅ルベライイトと視線を交わしたいと、胸が焦がれている。

動けば簡単に触れてしまう距離で、見つめ合いたいと。

リユーはその想いに——抗えなかった。

振り向けば、二人の何かが決定的に変わってしまうというのに。

もう戻れないというのに。

恐れることも、我慢することもできず、清廉な妖精エルフの心を捨てた。

(私は……………彼を)

染められた薄緑色の髪が揺れ、振り向く。

見開かれる深紅ルベライイトの瞳と、視線を絡め合う。

薄く開いた唇が、糸を手繰り寄せるように、もう一つの唇に近付いた。

濡れた眼差しが、溶けてしまいそうな頬が、彼との距離をゼロにする。

彼の腕は、拒まなかった。

自分の優柔不断を呪うように、瞳の中に映る妖精エルフを拒めないかのように。

ただただ涙を流す己の憧憬に謝罪を落とし、『彼女』を選んでしまった。

清流が流れる迷宮の深部で、二人きり。

人も怪物もない、ささやかな蒼の楽園で、二つの影は重なった。

もし。

本当に、もし。

愚直に、愚かに、ひたすらに、高過ぎる高嶺の花を追い求める憧憬しょうけい一途いちずという少年の物語を『正史』と呼ぶのなら。

その物語は、理想郷の片隅にぼつんと置かれたような、妖精ようせいの樹の『枝史』なのだろう。

それはベルが、魔法【ファイアボルト】を発現した翌日のことだった。

あまりに高価な魔導書グリモアを使ってしまったことに汗だくとなり、この本を貸してくれたシルのもと、『豊穣の女主人』へと駆け込んだ。

取り乱していた自分にミアの大喝が落ち、本当にこれでいいのかなあ、とベルが手を頭に回し、シルと苦笑を交わしていると、

「シルー！ お弁当を忘れてるニャー！」

厨房の方から、キャットピープルの料理人シェフが走ってきた。

両手に持ったバスケットは、シルがベルのためにいつも用意してくれている昼食だろう。彼女は慌てて駆け寄ったかと思うと、ベル達の目の前で見事に後ろ足を前足に引っかけて——宙を飛んだ。

「えっ」

「あっ」

「ニヨ!?」

ベル、シル、少女の順でこぼれ落ちる声。

何でもないところでずっこけた、とベルが衝撃を受けている間にも、料理人の少女とバスケットは床に吸い込まれていく。シルの心情を一言で表している眩きが虚しく響く中、ゆつくりとバスケットはその中身をぶちまける――

「それは見過ごせない」

――ことはなかった。

まるで疾風が起こつたかのように、何者かが走り抜け、バスケットを見事に捕まえ、落下を阻止したのだ。

「!!」

その時、ベルの双眸は大きく見開かれた。

一瞬の疾風の凄まじさに、目を奪われてしまったのだ。

Lv.1の下級冒険者であっても『次元が違う』と、そう理解してしまうほどの挙動に。

ベルは見た。

その人物を。

シル達と同じ若葉色の制服と頭飾。

ふわりとスカートを僅かに膨らませ、何事もなかったかのようにたたく細身のエルフ。

彼女の片腕には、バスケットの他にも自分とそう変わらない体格のキャットピールが、悠々と抱えられていた。

「ふおおおっ！ リュー、ホント助かったニヤァー！ あのままだったらミヤァーはシルにフルボッコにされてたニヤァー！」

「そんなことしないよっ！」

「メイ、貴方はあまり動かない方がいい。持ち運ぶのは私達に任せて、大人しく美味しい料理を作っていてください。……あんまりな言い方ですが、貴方が動く私達の仕事が増える」

放心するベルを他所に、メイと呼ばれた料理人、顔を赤らめて叫ぶシル、そして件の人物の順で声が交わされる。

『豊穣の女主人』の店員の一人、エルフのリュー。

ベルも彼女のことは知っている。

つい先日、なくしたと思っていた《ヘスティア・ナイフ》を見つけ出してもらったばかりだし、その前には冒険者に絡まれていたベルと小さな少女を助けてくれた。

そう、知っていたのだ。彼女がただ者ではないと、これまでのことから気付いていた。

しかし、その事前の認識を差し引いても――速かった。

虚を突かれて全く反応できなかったベルと異なつて、リューはなんと長台の奥から飛び越え、まさに風のように颯爽と現れては惨事を防いでみせた。その細腕のどこにそんな力があるのか、今も両手が塞がっている状態で体の均衡は少しも崩れていない。

自分の目の前で起こつた一連の出来事を、時間をかけて分析し終えたベルは、信じられないほどの超人的な身のこなしに鳥肌が立ち、時間が経つても目を離せずにいた。

「シル、どうぞ」

「ありがとう、リュー」

バスケットを手渡しリューとシルを視界に置きながら、ベルは思った。

(もしかして、この人になら……戦い方を教えてもらえるんじゃないか?)

ベルにはずっと悩みがあった。それは所属派閥の構成員が自分一人しかいないこと。

迷宮探索はまだいい。実際にはエイナに注意されては心配される程度には良くないが、単独で探索するのにも慣れてきたし、最近では他派閥であるもののリルルカがサポーターとして協

力してくれている。自派閥の増員は急務ではあるが、まだ耐えられる。

問題は戦い方。【ファミリア】の先達が誰もいないベルは独学という名の我流で己を鍛えなければならぬ。そしてそれが非常に非効率的であるとベルは気付いている。——少なくとも、アイズ・ヴァレンシユタインという高過ぎる高嶺の花を追いかけるには『最短距離』ではない。それほどまでにベルの憧憬とは遠過ぎる存在だ。

主神の方でも、タケミカヅチ、という神にベルの力になれないか交渉してくれているそうだが、その男神もヘステイアに負けず劣らずパイトの激務に追われているらしい。眷族達も生まれ故郷が少々大変になっているらしく、今は仕送りのために新人を抱えるほどの余裕はないのだそうだ。『上層』の最下層に進攻している彼女達に無理に付いていても足を引っ張るだけだとわかつているし、何より貴重な時間を奪って稽古をつけてもらうことなんてできない。

詰まるところ、ベルは無所属の『実力者』を探していた。

あるいは無所属でなくとも派閥の制限を受けていない人物を。

それこそ、他派閥のベルに戦い方を教えてくれるような。

（この人……リユーさんには何の得もないし、僕の自分勝手な都合だけど……本当にヴァレンシユタインさんに追いつきたいなら、なり振り構ってられない……！ ダメもとで聞いてみるくらいなら……！）

まさか憧憬の少女本人から「私が教えてあげようか？」なんて都合のいい展開なんて起きるわけがないのだから。うん、ナイナイ。アリエナイ。

だからベルは静かに息を吸い、意を決した。

彼女に返せるものがあるなら全力で返そうという覚悟も決め、でもエルフってやつぱり綺麗で緊張するなあとその横顔の美しさにドギマギしながら、身を乗り出さそうと足を踏み出しかけたところで、

『ウニャアー!? リユー、ヘルプミー!?』

『皿がっ、皿の塔が崩れるニャー!! バベルしちゃうニャー!』

『誰が上手いこと言えって言ったんだよ! ちょ、やばっ、リユーごめんっ、本当に助けて!?!』

「……やれやれ」

厨房から響いてきた黒猫つぼさうな声と、馬鹿猫と呼ばれてそんな人物の悲鳴と、殴ることが得意そうな店員の声が響いてきた。

リユーは軽い溜息とともに、タンツッ! と足を鳴らす。

軽く踏み切ったかと思うと、一息の跳躍で再び長台を軽やかに飛び越えてしまい、慌ただしい厨房の收拾へ向かった。あ、と間抜けな眩きを落とすベルを置いて。

料理人のキャットピールも急いで後を追いつ、また転びかける中、ベルとシルだけが店内に取り残される。

「あはは……ごめんなさい、慌ただしくて」

「い、いえっ、別に迷惑なんてかかってないですから」

「ありがとうございます。リユーはすごい動けるから、みんなに頼りにされてるんです」

そうだろうな、とベルは心の中で素直に頷いた。

路地裏で助けてもらった一件を踏まえても、荒事でも何でも、彼女一人がいれば片がついてしまうように思える。

見目麗しいエルフということ踏まえても、それだけリユーは存在感があった。

「あの、シルさん。リユーさんは、その、冒険者だったりするんですか……?」

「はい、そうだったみたいです。ちよっと今は……所属していた【ファミリア】から独立しているんですけど……」

店主のミアと同じということだろうか？

以前に聞いたことがある、この酒場の従業員は多くがわけあり、というシルの言葉をベルは思い返した。

(時間は……ないか)

ちらりと壁際に設置されている酒場の古時計を見やって、リルルカとの待ち合わせが近付いていることを確認する。

今日はダンジョン探索をともに行う予定だ。遅刻して向かうのは悪い。

リユーと話してみたかった、という思いに蓋をしようとすると、シルが何かを感じ取ったのか小首を傾げた。

「どうしたんですか、ベルさん？」

「あ、いや、その………リユーさんって、すごく強そうで、冒険者としても僕なんかよりずっと先輩っていう感じがしたので……もしよかったら色々教えてもらおうかな、なんて……」

言葉を濁しつつ、つい胸の内を喋ってしまったと、シルはじつと見つめてきた。

こちらの心を見透かすかのような薄鈍色の瞳にベルがつい気圧され、挙動不審になっていると……次には、にこつと娘は微笑んだ。

「私がリユーに言つて、話をつけておきましようか？」

「えっ？」

「色々あって、リユーは冒険者様達からは距離を取っているんですけど、私からお願ひすれば多分聞いてくれると思います。ベルさんに不都合がないようなら、どうでしょう？」

正直に言えば、揺れた。

ベルにはそれが、魅力的な案に聞こえた。

シルの話が確かなら、リユーに約束を取り付けるにはこれ以上有効な手はないだろう。先程なり振り構っていられないと思つたのは他ならないベルだ。ここは小さな尻尾をブンブンと振る兔のように飛びつくべきなのだろう。しかし。

「……ありがとうございます。でも、やっぱり自分の口で言おうと思います。なり振り構つてはいられないけど……こういうことは、人に任せちゃいけないことだと思つるので」

「……そうですか。ベルさんがそう言うなら」

すいません、とせつかくの親切を断ってしまったことを謝罪する。

それでもこちらを見つめ直すシルは、何でもないように許してくれた。

「じゃあ、事情だけはリユーに話しておきますね。ベルさんが話したいことがあるつて。それくらいならいいですよね？」

「そう、です。それくらいなら……何から何まですいません、本当にありがとうございます。じゃあ僕はこれで」

そう言つて立ち去ろうとするベルに、シルはリユーに手渡されていたバスケットを持ち上げる。

「ベルさん。今日も、受け取つてもらえますか？」

「……い、いただきます」

照れ臭そうな笑みと一緒に両手で差し出されるバスケットを、どもりながら受け取る。

ベルは赤くなりながらも一度感謝を告げ、今度こそ『豊穡の女主人』を後にする。

「……少し意地悪しちゃつた。あの子が強くなることを歓迎している筈なのに」

酒場の外まで出て、東のメインストリートの方に遠ざかっていく少年の後ろ姿を眺めながら、薄鈍色の髪の娘は一人呟いた。

もし、彼女の申し出を受けていたら、ベルの道は変わっていただろう。

リユー・リオンは妖精の中でも潔癖の潔癖。

知己を利用して自分に依頼を取り付けようとするれば、快く思わない。それが知己の想い人であつたとしても。少なくとも今の少年との人間関係では、彼女は申し出を断っていただろう。

因らずも少年は『正解』を選んだ。

この道の先にいくつも存在する岐路の中で、最初の正しい『選択』を。

小人族の少女を助け出した少年は、『妖精との時間』を手に入れることになる。



リリルカを『キラアアント』の群れから救い出し、あらためて本当のパーティとして手を繋いだ後。

ヘステシアとリリルカが顔合わせをした日の夜、ベルは緊張感と戦いながら、リユーへの師事の打診に臨もうとしていた。

「話はシルから聞いています。私に頼みたいことがあるのですが」

「は、はいっ」

シルの計らいによつて、あらかじめベルの訪問を承知していたリユーとは、すんなりと話の場を設けることができた。といつても酒場の仕事の合間を縫つて、ベルを店の裏手側に案内したに過ぎないが。

少し冷たくも感じる、しかし普段通りの物腰のリユーに、ベルは腹を据えて心の内を話した。

目標があること。だから強くなりたいたいこと。

そのために、リユーに教えを請いたいこと。

じつとこちらを見つめてくる空色の瞳に、何度も声をつつかえさせながら、それでもベルは自分の言葉で全てを伝えきつた。

何も口を挟まず、話を最後まで聞いたリユーがまず見せたのは、ほんの僅かな戸惑いだった。「私は人にものを教えられるほど、できたエルフではないのですが……何故私に教えを請おうとしたのか、理由を聞いてもいいですか？」

「そ、その、本当に単純なんですけど……僕よりリユーさんの方が、ずっと強そうだったから……」

本当に単純過ぎる明快な理由に、自分で言つてから汗を流すベルは、無性に両手で頭を抱えて、その場に蹲りたくなつてしまふ。

多少の語弊があるが、リユーはベルも大好きなエルフだ。

気さくで親身な、ハーフエルフのエイナと接していて忘れそうになるが、本来、森の妖精とも謳われる彼女達は誇り高い。大抵は他種族に対して鼻持ちならない態度を取るとベルも聞いており、認めた者でなければ肌の接触を許さない者までいるほどだ。

リユーはベルの知識にそぐわないほど礼儀正しくて恬淡なエルフに見えるが、やはり彼女を彼女たらしめる気高さが確かに存在した。

森の中で静かに月の光を浴びる、抜き身の短剣。

そんな想像がベルの脳裏に過る。自身の信条に反する言動や姿勢は即切つて捨てられそうとも。

だからベルは、こちらのことを真つ直ぐ見据えてくる空色の瞳に、慌てて言葉を付け足そうともがいた。もつとマシなことを言おうとして、とにかく口走つた。

「えつと！ ただ強い人なら誰でもいいっていうわけじゃなくて！ リユーさんだったから頼みたかつたからというかつ、つまり、あのつ、身のこながすごくて、本当に疾風みたいな人

だって！一目ですごい人だってわかったというか、この人なら僕にはないものをいっばい
持つてるんじゃないかって！だからっ……その……」

「……………教わりたいつて、そう思ったんです、リユーさんに。僕の目標が、リユーさんの動
きの中に見ることができたっていうか……………」

「……………」
「……………ごめんなさい、後は……僕の都合です」

最後まで話せなかった事情も、素直に打ち明ける。
現在【ファミリア】から独立している冒険者の存在は、ベルの抱える条件にちょうどよかつ
たこと。【ファミリア】の規律と一見無縁そうな『野良の元冒険者』はあまりにも、渡りに船
であったこと。

リユーの瞳に隠し事ができなかったベルは、他の冒険者ならば決して言わなかったことも、
全て吐いてしまった。

馬鹿正直に語った自身に項垂れる。

脈がないことを悟りつつ、ベルはリユーの言葉を待った。

「わかりました。いいでしょう」

「……………」

「クラネルさんの求めるところの師範を引き受けると、そう言っているのです」

「えっ？」

顔を上げたベルは、まさしく間抜けな表情を浮かべた。

目を丸くし、一度幻聴を疑ってしまう。

リユーはそんなベルの間抜け面を見ても顔色を変えず、淡々と言葉を並べる。

「貴方は偽ることをしなかった。至情も伝わってきた。十分です。私は貴方のその直向きな意
志を無下にしたくはない」

「え、ええつと……………」

何とか状況を呑み込もうと困惑と格闘していたベルは、そこで動きを止めることになる。

冷然としていた妖精の唇に、ほのかな、本当に小さな、笑みが咲いたのだ。

「貴方は、尊敬に値するヒーマンだ」

不意打ちだった。

深紅の瞳が大きく見張られるくらい、それくらい美しかった。

月の光の中から溶けて出てきたような淡い微笑み。

細い眉を柔らかくして、小振りな唇が綻ぶ。

清楚な白い花のようなリユーの笑顔に、ベルは一瞬で真っ赤になった。

目指す憧憬が存在するというのに、見惚れてしまったのだ。

「自身の体たらくで、私の冒険者としての時間は止まっていますが……貴方のような人な
らば、協力することにやぶさかではない。私で良かったら、力を貸しましょう」

「……………」

「聞いていますか、クラネルさん？」

「えっ、あつ?! は、はいっ!」

「顔が赤い。体調管理は問題ありませんか？ 冒険者ならば、自身の体には常に意識を払って
おきなさい」

「わ、わかりましたっ!」

顔が燃えている原因については全くの外れだったが、早速冒険者の先達として忠告を与え
られ、ベルは直立の姿勢を取って返事をした。

生真面目過ぎるくらいに生真面目なエルフは、鷹揚に頷いた。今後の予定を言い渡し、「酒場の仕事があるので今夜はこれで」と何事もなかったかのようにな店に勤めへと戻っていった。彼女が去った後も放心していたベルは、ゆつくりと息を吐き出した。頬に溜まっていた熱を逃がすように。

エルフの笑顔は危険なものだと、身をもって思い知らされた。

特に、常日頃から凜々しいエルフの笑顔は凶悪である。

ベルのような愚か者を骨抜きにする、伝家の宝刀。

気を許した相手だけに見せる可憐な笑顔。

何故エルフが他の種族に人気があるのか、ベルは今更ながら、理解できた気がした。

「……アリーゼ、みんな。これで良いと思いませんか？」

一方で、呆ける少年の前から姿を消したリユーは、酒場の裏口前で立ち止まり、夜空を仰いでいた。

口からふわりと浮いた吹きを、満天の星々に投げかける。

(私の『正義』は、醜い復讐の炎によって燃え、灰となった。それでもアリーゼ達が遺した正義の成果を見届けるために、こうして素性まで隠してオラリオに居残っている……)

主神のもとにも戻れず。

シルと、豊穣の酒場に恩返しをしたいという思いもあつて。

リユーは今日まで自分のことを植物だと思っていた。あるいは風化した石像だろうか。どこへも向かえず、かつての『正義』の教えに身を投じることもできない。ただ凄惨な『悪』の時代を乗り越えたオラリオがどこに向かうのか、見守るだけの樹木となっていた。

そんなリユーが今日、日々の酒場の仕事以外の事柄に手を出そうとしている。

(ベル・クラネル……私の手を握れた人)

少年がシルの想い人だということもある。

先程語った通り、人柄を善性だと認め、尊んだ理由も多分にある。

だが一番は、ナイフを盗人から取り返した時、リユーの手を握ることができたからだ。

(シル、そしてアリーゼと同じ……)

自分でも嫌気が差すほどエルフの慣習が染みついたリユーは、初対面の人物の接触を避け、手が触れようものなら弾き飛ばしてしまふ。

そんなリユーの悪癖をもとせず、手を握れた人物が二人いた。

それがシルと、今はもういない【アストレア・ファミリア】の団長アリーゼ。

そして最近、二人だけだった『特別』が三人に増えた。

(彼に……アリーゼの面影を重ねるのは無礼だろう。申し込まれた鍛練を、正義か否かと論じるもの外れだ)

全ての事柄を、正邪の物差しで計るつもりなど毛頭ない。

これは要は、リユーがアリーゼの面影を無理やり少年と重ね合わせようとしている感傷であり、いつか彼女が言っていた『自分の手を握れる者が現れたら離しては駄目』という助言を参考しているに過ぎない。恩人のためにも想い人を死なすまいと気を回している背景も多分にある。

だから、時間が動き出したとは思わない。

リユーの足は未だ止まらなかったまま。

『正義』を探す旅を再開することもできず、無為に時を過ごしている。

「……だから」

だからリユーはほんの少しだけ、期待していた。

力を貸してあげたいと思える人物に出会えたことに。

自分の手を握れた少年と接して、些細なことでもいいから自身の内側の何かが変わって、五年前から止まっている時計の針が動き出してくれることに。

打算的な、と言って自分を浅ましく思う感情がないわけではない。
それでも。

『リオン。正義は――』

七年前に聞いた大切な黄昏の言葉と、今はいない少女の笑顔が脳裏に蘇る。

しばし目を瞑っていたリユーは、ゆつくりと瞼を開けた。

星々は変わらずリユーを照らし、見守っている。

「こんなことで、『正義』が巡るとは思わない……。それでも、私がみんなから授かった教えを、彼に与え、手助けすることくらいは……。……大目に見てもらえる筈だ」

視線の先の星々が、一瞬きらめいた気がした。
リユーは微笑を向けた。

妖精が視線を切り、酒場に戻った直後、果てのない荒野を行く旅人を祝福するように、一筋の流星が空を渡るのだった。

続く